

なぜ、ろう教育の古い話の聞き書きをしようと思ったのか  
矢沢インタビューの意義

上農聴覚障害児教育相談室  
上農正剛

矢沢国光（やざわ くにてる）は一昨年令和 6 年（2024 年）、85 歳で亡くなるまで現役の教育者として精力的にろう教育に関わり続けた人でした。東京大学理学部地球物理学科を卒業したあと、昭和 45 年（1970 年）に東京都立足立ろう学校の小学部で算数を教える教員として就職したのがその出発点でした。それ以来 54 年間、ろう学校の一教員として聞こえない子どもたちに向き合い続け、同時に民間の教育研究会の活動を熱心に牽引しました。

私は矢沢が亡くなる前年の令和 5（2023）年に 3 回にわたってロングインタビューを実施しました。50 数年前のろう教育の状況について詳しい聴き取りをしたわけですが、なぜそんな「大昔の話」を根掘り葉掘り聞いたのか？無論、そこには明確な目的がありました。

多くの場合、若い人々の関心は現在の課題と未来への模索に向けられていて、過去の出来事にはあまり関心が向けられません。まして何十年も前のろう教育のことを知らされても、それは現在の問題と何の関係もない単なる退屈な昔話にしか映らないかもしれません。

しかし、もし「昔の出来事」が現在の問題にしっかり結びついているとしたら、どうでしょうか？もし私たちが現在「新しい初めての試み」と思って実践している取り組みが実は数十年前にほとんど同じ形で既実践されていたとしたら、どうでしょうか？つまり、私たちはそれと知らず、過去の取り組みを無自覚に繰り返しているとしたら、どうでしょうか？その過去の取り組みには詳細な反省的考察が記録として残っていて、それが誰からも省みられていないとしたら、どうでしょうか？

例えば、現在、ろう教育の世界では手話の必要性について強硬に反対する人はおそらくいないでしょう。手話の必要性は関係者の間では既に当然の共通理解、了解事項になっていると思われれます。しかし、それはずっと以前からそうだったわけではありません。50 数年前までは口話法という音声言語の習得を絶対視する教育理念が主流でした。そして、その時代には手話は否定されていました。今の若い世代には余り自覚がないかも知れませんが、ろう教育において昔から手話が「当たり前なもの」だったわけでは決してないのです。

ならば、その「当たり前」はいつから「当たり前」になったのでしょうか？手話が積極的にろう教育に取り入れられるようになったのは具体的にいつからなのか？その大きな

「変化」はどのような事情によって生じたのか？その変化をもたらしたのはどんな人たちだったのか？今風な言い方をすれば、口話法が主流だったろう教育の世界に手話の導入という革新（イノベーション）をもたらしたのはどのような事情だったのか？そのスタートアップの状況において問題になった具体的な課題はどんなことだったのか？

現在、手話を活用することで教育実践の効果を生み出している教師は多いと思いますが、その手話の活用という不可欠な手立ては一体どのようにして関係者間の共有財産になったのかという経緯については、現在、多くの人は無関心、無自覚なままであることが多いのではないのでしょうか。しかし、その恩恵は多くの先達の関係者の努力によって準備されたものだったのです。

ろう教育の現場に手話を導入することの意義を広く全国の聾学校に知らしめたのは「トータルコミュニケーション研究会」（略称「TC研」／現「ろう・難聴教育研究会」）という民間の教育研究団体でした。毎年開催されたこの研究会の年次大会に全国各地からろう学校の教員や関係者が多数参加して、そこで手話に関する知識や実践方法を学び、それを現場に持ち帰り実践に移していきました。その結果、手話の活用が全国のろう学校に広まっていったのです。

口話教育が教育行政の意向による上からの指示だったとすれば、手話による状況改善の試みはまさに教育現場から始まった「草の根」的实践でしたし、それは徐々に拡散浸透していきました。トータルコミュニケーション研究会はまさにその改革の発信源の役割を担っていたわけです。このことは歴史的事実としてしっかり記憶されるべきだろうと思います。

ろう教育における手話研究と教育実践の発端を開いたのは当時栃木ろう学校の教員だった田上隆司（たのかみ たかし）であり、そこからTC研という全国規模の民間教育研究会が生まれました。そして、その研究会最初期の立ち上げメンバーの一人が矢沢国光でした。

残念ながら田上は令和2年（2020年）に亡くなったので、矢沢はトータルコミュニケーション研究会発足時の状況を知っている数少ない「生き証人」の一人だったのです。

かつて主流だった口話法教育には実際は様々な問題がありました。その状況を根本的に見直し、改善する対策としてそれまで否定されていた手話の価値が再認識され、教育現場に積極的に導入されるようになったことで、聞こえない子どもたちのコミュニケーション環境は間違いなく抜本的に改善されるようになりました。

しかし、「手話が当たり前なもの」になると、今度は手話自体に関する様々な新たなレベルの課題が生じるようになってきました。また、手話の導入が試みられた当初、先人たちが重視し、慎重に考慮した事柄がいつしか軽んじられ、省みられなくなるという現象が起きてきたようにもみえます。

ろう教育における手話の活用はどうあるべきなのか？聞こえない子どもにとって母語として手話を大切にすることのためには具体的にどのような環境を整備すればいいの

か？それらの根本的な問題を今一度、各人が真摯に考えようとするならば、そのための方法のひとつは先人たちの努力の足跡を今一度謙虚な眼差しで丁寧にたどり直してみることではないでしょうか。

ですから、このインタビューを計画した私の意図は、単なる懐古趣味を満たすためなどにあっただけではなく、あくまで現在の問題を考えるために必要な作業という認識から生じたものでした。矢沢もその意図に全面的に同意してインタビューの依頼を快く引き受けてくれました。

歴史家のE・H・カーに「歴史とは現在と過去のあいだの終わりのない対話なのだ」という有名なことばがあります。また東洋には「温故知新」という同様の諺もあります。「現在の問題を考えるためには過去をたずねよ」という教えでしょう。

インタビューを丁寧に読んでもらえばわかると思いますが、矢沢の歴史的証言には示唆に富んだいくつもの貴重な内容が含まれています（その中には極少数の関係者にしか知られていない重要な出来事がありますし、その功績が現在の問題に本質的に深く関わっている、そんな先駆的な仕事をした人物の話も語られています）。

矢沢はインタビューの翌年にこの世を去りました。結果的にこのインタビューは矢沢が私たちに残してくれた遺言になりました。一人でも多くの人が矢沢のことばに耳を傾け、それを各自が自分の試みに活かすことが出来れば、長時間のインタビューに誠実に応えてくれた矢沢もきっと喜ぶだろうと思います。

最後の病床にあっても、ろう教育に対する熱情を失わなかった矢沢の思いがこのインタビューを通して一人でも多くの関係者に届けば幸いです。